

## 当事者の体験に学ぶということ

看護教員 瀬戸山陽子

ゆきさんの「生きた教科書でめぐり返しプロジェクト」を受講したこの数か月間は、自分がいかに社会のことを知らないか、「無知の知」を痛感する日々でした。

今年最後の授業に欠席してしまうのは大変残念ですが、せっかくの機会を頂いたので、「当事者の体験に学ぶ」ことについて、医療者教育に携わる端くれであり、障害当事者でもある自分（注 1）が、いま感じていることを書かせて頂きます。

でめぐり返しプロジェクトでは、私はいつも、「生きた教科書」である当事者の方が体験を話す様子に圧倒的な迫力を感じていました。自分が無知であることに気付き、突き動かされるように勉強しなくては、何か行動しなくてはと思わされる経験。これこそ、でめぐり家の方々から学ぶ意味なのではないかと感じています。

今の時代、答えがある一般的なことは、インターネットを駆使すればたいいていの情報を得ることが可能です。しかしこの、人となりと共に伝わってくる当事者の言葉に共感し、突き動かされて考え行動することは、忘れようと思っても忘れられない経験で、やはり生きた教科書である当事者の方からしか得られないものではないのでしょうか。

私は医療者教育に関わるようになって日が浅いのですが、自分自身がでめぐり返しプロジェクトを体験したことで、自分が行っている医療者教育に、もっと心を揺さぶられてしまうような体験を織り込みたい…と感じるようになりました。目の前にいる相手に共感して、必死で考えて、行動すること。それこそこれから医療者になる人には必要なのではないかと思います。一般的な知識はインターネットで得られますし、医療に関しては知識自体が日進月歩なので、すぐに更新されてしまいます。

だとしたら、頭が柔らかい学生が学ぶ基礎教育課程で、変わってしまう知識の記憶に終始するのは勿体ないことです。むしろ、答えが一つではないことを考え続ける体力を養ったり、人に共感し感動する体験をしたり、また学び方を学ぶような、そんな経験こそが重要なのではないかと、そしてそれらを叶えるのがでめぐり返しという学び方なのではないかと、いま数か月を振り返って改めて感じています。

保健医療の当事者の語りをインタビュー動画で記録して、その動画をウェブで公開する DIPEx（ディペックス）というプロジェクトがあります。私も 10 年ほどこのプロジェクトに関わっているのですが、当事者の方の話は、紙の教科書では学べないことだらけ。DIPEx もやはり、当事者の話に深く共感し、突き動かされ、社会の課題について考えざるを得なくなる、そういう教材です。でんぐり返しプロジェクトや DIPEx など、当事者から学ぶ機会や教材こそ、これからの複雑な医療を担う医療者の教育に、ますます求められてくるように思います。

また私は障害を持つ当事者としても、でんぐり返しプロジェクトの受講を通じて、様々な学びを得ました。最たるものは、当事者が持つ力です。

ハニー（埴岡）先生が話された内容ですが、病いや障害などの困難を抱えた人が、「でんぐり家」として社会を変える存在になるまでのプロセスは非常に興味深く、人間が持つ底力を感じました。

今、私にも、障害当事者として社会の課題を感じるがあります。それは、障害を持ちながら高等教育を受ける「障害学生」を取り巻く環境です。日本の障害学生は全学生の 0.86%に過ぎず、欧米に比べると非常に少ない状況。「大学で学びたい」という思いが、障害によって閉ざされてしまう人がいる…。これが、「大学全入時代」と呼ばれる日本の現状です。

その状況を変えたいと思った時、自分は当事者として何ができるだろうかと、でんぐり家の方から話を聞く中で考えさせられました。私はもちろん自分がでんぐり家であるかもしれないなんてことは、おこがましくて言えません。またでんぐり家は、結果として生まれてくるものであっても、最初から目指してなるものではなさそうです。それでも、多くのでんぐり家の先輩方の底力に励まされて、自分も当事者として、社会の課題に対してできることから行動していきたいと思っています。

（注 1）

私は看護学生だった大学在学中に、頭蓋内の奇形が原因の三叉神経痛を治療する脳外科手術で歩行に障害が残りました。直後は車椅子でしたが、2 年間の休学を経て杖歩行で大学に戻り、多くのサポートを得て卒業することが出来ました。現在も歩行には杖（相棒）を使っています。